

ポイント完全マスター！ 古文・漢文の達人

はじめに

高校入試に出題される古文では、難しい古文の単語や表現には注釈がつけられているのがふつうです。ですから、実戦的な古文・漢文の学習をするにあたって一番大切なことは、「どのように話の筋や内容をつかむか」にあります。

そのためには、よく使われ、意味や用法を取り違えやすい助詞や助動詞、敬語表現の理解が必要です。さらには、古文の世界特有の考え方や生活様式の理解も欠かせません。

本書は、このような観点から真に実力がつき、古文・漢文を得点源にできるようにするために、下記のような工夫をこらして作られています。

(1) 重要な古文の単語は、巻末に「重要古語単語集」として収録しました。ここに載っている単語や例文は、いずれも高校入試に出題されたり教科書に掲載されている重要なものです。大いに利用して下さい。またこの単語集は、高校生の初級用の辞書としても充分に利用できます。

(2) 文法については、文語文法特有の用語などは極力使っていません。そして、**文法のきまりをパターン化**することで無理なく意味を理解できるように工夫しています。なお日本語の特性としては、文末で意味が決定するので、**文末の意味をつかむ**ことが大切です。本書では、そのための理解に欠かすことのできない**助詞や助動詞の説明を重視**しています。

(3) 古文の理解に欠かせない**基礎知識や図**などもふんだんに取り入れました。

(4) 本書では、**古文・漢文を生徒が自学自習**できることを目的に編集しているため、基礎の基礎からわかりやすく解説しています。まず、単元上段の解説を読み、次に下段の確認稽古へと進んで下さい。

(5) 演習道場は、**入試問題からの出題**です。各単元ごとに挑戦することもできますが、全単元を一通り完了させてから解くという方法も有効です。その際は、各単元のポイントを再度復習しながら行うと良いでしょう。

(6) 漢文の出題はそう多くはありませんが、その単元を一通り学べば**高校初級の土台**を作ること可能です。

▼以上の注意を念頭に置いて、ていねいにやりとげていけば「古文・漢文」が得意になり、試験でも高得点を取れるものと確信します。

*なお、本書では、問題作成の都合により、一部原文を改めた箇所があります。

1 五十音図

p4

2 歴史的かなづかい

p6

演習道場 歴史的かなづかい

p10

3 古文の特徴

p12

4 文学史のまとめ

p16

演習道場 文学史のまとめ

p18

5 古文と現代文の比較

p20

6 単語集の利用

p22

演習道場 単語集の利用

p24

7 「ば」の訳し方

p26

演習道場 「ば」の訳し方

p28

8 「に」の訳し方

p30

演習道場 「に」の訳し方

p32

9 省略の用法

p34

演習道場 省略の用法

p36

10 会話部分の把握

p38

演習道場 会話部分の把握

p40

11 係り結びの用法

p42

演習道場 係り結びの用法

p44

12 敬語の用法

p46

演習道場 敬語の用法

p48

13 「の」の訳し方

p50

演習道場 「の」の訳し方

p52

14 「ぬ」の訳し方

p54

演習道場 「ぬ」の訳し方

p56

15 打ち消しの用法

p58

演習道場 打ち消しの用法

p60

16 「べし」の用法と強調表現

p62

17 親孝行にまつわる話

p64

演習道場 親孝行にまつわる話

p66

18 和歌に関する話

p68

演習道場 和歌に関する話

p70

19 笑いを誘う話

p72

演習道場 笑いを誘う話

p74

20 正直者が得をする話

p76

演習道場 正直者が得をする話

p78

21 内容を読み取る手順

p80

22 設問ごとの解き方①

p82

演習道場① 指示語のとらえ方

p84

23 設問ごとの解き方②

p88

演習道場② 主語のとらえ方

p86

24 漢文の読み方

p92

演習道場 漢文の読み方

p96

25 漢詩の読み方

p98

演習道場 漢詩の読み方

p100

26 主な故事成語

p102

演習道場 主な故事成語

p104

重要古語単語集

p107

【付録】方角・時刻、月の異名、主な活用表(動詞・助動詞・形容詞・形容動詞)

演習道場

歴史的かなづかい

得点

100

学習日

1 次の——線部を現代かなづかに直しなさい。(各3点、計60点)

解答欄						
19	16	13	10	7	4	1
20	17	14	11	8	5	2
	18	15	12	9	6	3

- (1) 春はあけぼの。①やうやう白くなりゆく②山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり。やみも③なほ、ほたるの④おほく飛び⑤ちがひたる。
- (2) いろは⑥にほへと ちりぬるを わがよたれそ つねならむ⑦うゐのおくやま ⑧けふこえて あさきゆめみし ⑨ゑいもせず。
- (3) それを見れば、三寸ばかりなる人、いと⑩うつくしうて⑪あたり。
- (4) 翁⑫いふやう、「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中に⑬おはするにて知りぬ。」
- (5) 野分のまたの日こそ、⑭いみじう⑮あはれに⑯をかしけれ。

右下

(6) ⑰さやうの所にてこそ、⑱よろづに心づかひせらるれ。

(7) とりつき⑲たまへる手を引きのけて、船をば⑳つゐにこぎいだし。

訳

(1) 春は、夜明けがいちばん風情がある。しらじらと夜が明けていき、山際の空が少し明るくなってきた、紫がかつた雲が細くたなびいているのが、なんとも風情がある。夏は夜が風情がある。月夜のころは言うまでもないが、闇夜でも多くの蛍が飛び交っているのはとても風情がある。

(2) 美しく照り映えていても、やがて散りおとろえてしまうものだ。この世に誰が生きながらえるであろうか。はかなく移り変わる奥山を今日越えて、浅い夢は見まい。酔ったような生涯は過ぎすまい。

(3) それを見ると、三寸ほどの人が、とてもかわいらしい様子で座っていた。

(4) 翁が言うには、「私が朝夕ごとに見る竹の中にいらっしやるので分かりました。」

(5) 野分の(吹いた)翌日こそ、とてもしみじみとした感じがする。

(6) そのような田舎では、何事につけても自然と気を使うようになる。

(7) しがみついておられた手を引き離して、船を遂に漕ぎ出す。



2 次の——線部を現代かなづかに直しして、全てひらがなで書きなさい。(各2点、計40点)

解答欄						
19	16	13	10	7	4	1
20	17	14	11	8	5	2
	18	15	12	9	6	3

(1) ある夜、まち①はづれをかけり②まはりて、一所③やゑんするを下し見て、もし知れる人にやと近寄りて④見むとするに地に近づけば⑤勢ひ弱くなりて、⑥思はず落ちたりければ、その男女おどろき叫びて逃れ走りける。あとに酒肴⑦さはに残りたるを、幸吉あくまで飲み⑧食ひして、また飛び去らむとするに地よりはたちあがり難き⑨ゆゑ、羽翼をおさめて歩いて⑩帰りける。

(2) 主上、維時を召して花の目録を書かして、これを御覧じて、漢字を⑪用ゐるべきよしを仰せらる。維時たちまちにこれを書きてたてまつる時、人二草の字を知らず、⑫競ひ来たりてこれを⑬問ふ。維時⑭いはく、「かくのごときが⑮ゆゑに、先日は仮名字を用ゐる。何ぞ⑯あざわらはれしや。」と言ふ。

(3) 人々興に入りて、瓶子の酒を⑰てうしに入れて見れば、浮草あ

右下

り。心みれば水なり。「これはいかに。⑰いつかう水にてあるは。」と⑱問へば、「よも⑲候はじ。やがて汲みて候ひつるを。」と⑳いふ。

訳

(1) ある夜、町はずれを飛びまわって、とある場所で夜宴をしているのを見おろして、もしかしたら知っている人だろうかと近寄って見ようとしたところ、地面に近づいたので風力が弱くなって、予想外にも墜落してしまつたので、人々は驚き叫んで逃げてしまつた。あとには酒や料理がたくさん残っていたが、幸吉は十分満足するまで飲み食いして、再び飛び去ろうとしたところ、地面からは飛び立ちにくいため、羽をたんで徒歩で帰つた。

(2) 天皇が、維時をお呼びになつて花の目録を書かせて、これをご覧になって、漢字を用ゐるべきであるとお命じになつた。維時はすぐさまこれを(漢字で)書いて献上するとき、他の蔵人たちは一つの草の名の漢字も知らず、競い合つてやつて来て、これ(読み方)を尋ねた。維時は、「このようなことであるから、先日は仮名を用いたのです。どうしてお笑いになつたのですか。」と言つた。

(3) 人々は盛り上がり、徳利の酒を銚子に入れてみると、浮き草が混じつていた。試しに飲んでみると、水であつた。「これはどうしたことか。まったく水ではないか。」と尋ねると、「まさかそんなことはないでしょう。すぐに汲みましたのに。」と答えた。

P. 6 ~ 9 訓練の解答

- 1 ①え ②う ③わ ④おい ⑤い ② ①じ ②ず ③ ①ん ②い
 ③え ④お ④ ①か ②が ③こ ④そ ⑤お ⑥おう ⑤ ①ゆう
 ②きよう ③ちよう ④よう